

| | |
|----------|-----------------------------|
| 氏名（本籍） | イシ　ザキ　ヒデ　カズ 石　崎　秀　和（東京都） |
| 学位の種類 | 博士（音楽） |
| 学位記番号 | 博音第65号 |
| 学位授与年月日 | 平成17年3月25日 |
| 学位論文等題目 | 論文　カール・レーヴェのバラード作品研究 |
| 論文等審査委員 | |
| （総合主査） | 東京芸術大学　教授（音楽学部）　多田羅迪夫 |
| （演奏審査主査） | ”　”　（”）　多田羅迪夫 |
| （演奏副査） | ”　”　（”）　伊原直子 |
| （”） | ”　”　（”）　朝倉蒼生 |
| （”） | ”　”　（”）　中嶋敬彦 |
| （”） | ”　”　（”）　土田英三郎 |
| （論文審査主査） | ”　”　（”）　多田羅迪夫 |
| （論文副査） | ”　”　（”）　伊原直子 |
| （”） | ”　”　（”）　朝倉蒼生 |
| （”） | ”　”　（”）　中嶋敬彦 |
| （”） | ”　”　（”）　土田英三郎 |

（論文内容の要旨）

ドイツの作曲家、歌手、指揮者であるカール・レーヴェ（1796-1869）は「バラード作曲家」として音楽史上に名を残している。彼は生涯バラード作品を120曲余り作曲したほか、歌曲、オラトリオ、オペラ、ピアノ・ソナタ、弦楽四重奏など多岐に渡り、600曲近くにも及ぶ作品を残していることはあまり知られていない。

本論文はレーヴェのバラード作品研究である。彼のバラード作品における「詩」と「音楽」を様々な観点から考察して、彼のバラード作品の本質及び特性を導き出す。また演奏の解釈も踏まえて、彼のバラード作品の魅力を再認識することが本論文の目的である。

研究に先立ち、本論文及び博士リサイタルのために彼のバラード作品の中からジャンル、年代に偏りがないように22曲を厳選した。

第1章では先行研究の概観として、これまでのレーヴェ研究及びバラード作品研究を振り返った。日本におけるレーヴェのバラード作品研究はほとんど皆無であると言っていい。また彼のバラード作品が演奏会に取り上げられることも極めて稀であるのが現状である。

第2章ではレーヴェの生涯をたどり、エピソードを踏まえながら《アーチボルド・ダグラス》を除く21曲のバラード作品の考察を行い、また演奏の際の解釈を述べた。彼が本格的にバラードの作曲に取り組んだのは30代後半の演奏旅行を始めてからで、自作の曲を弾き語りしながら積極的に演奏旅行を行い、行く先々で成功を収めていた。特にウィーン市民からは「北ドイツのシュ

ーベルト」と称賛され、彼の名声は国内外に知れ渡っていた。彼はバラード作品を晩年まで絶え間なく作曲し続けたが、作曲様式の変化は生涯を通してさほど見受けられない。彼のバラード作品を特徴づけるものとして、情景描写、心理描写を的確に捉えたモチーフ、独特のなじみやすい素朴なメロディーが挙げられる。これらは彼の中で、常にアイデア豊かに生み出されていた。彼の直接的なモチーフ、また「語る」ことを前提としたメロディーは、テキストにおける様々な場面や人物と対応し、詩と音楽の見事な統一感を作り出している。

第3章では彼の長大でかつ最も完成度が高いと思われる《アーチボルド・ダグラス》の作品分析を行い、彼のバラード作品に関しての具体的な検証を試みた。この作品は「叙情性」「劇性」の両方を兼ね備えており、彼のバラード作品の集大成とも言える。詩に関しては、基本的にテキストの韻律を踏まえているが、時には韻律にとらわれず、テキストを自ら修正して本来詩が持つアクセントを重視し、それを音楽上で生き生きと語らせている。音楽に関しては、単純な和声進行ではあるが、巧みな転調が展開されている。またダグラス伯の回想モチーフは作品全体に統一感を持たせている。

結論として、彼のバラード作品の本質は、本来詩が持つアクセントが重視された「詩」と、独特のモチーフ、素朴なメロディーで形成される「音楽」の自然で密接な結びつきである。その素朴で単純な作風が、彼のバラード作品を軽視させる一つの原因だという事実は否めない。しかし彼は、「叙情性」「劇性」両方を兼ね備える「バラード」という「詩」と「音楽」による立体的な空間芸術の中に、独自の世界を展開させた作曲家であると言える。

また、バラード作品としての「題材」を直接的に生き生きと語る演奏においてのみ、彼のバラード作品の特性が効果的に発揮されるのである。本論文におけるバラード作品研究をもとに演奏することで、彼のバラード作品の魅力を再認識することができよう。